The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青年の抱くスクールカーストの認知度、印象および偏見の検討 ： 過去のグループ間地位、現在の社会的支配志向性との関連
Author(s)	水野, 君平
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 35-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70539
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

青年の抱くスクールカーストの認知度、印象および偏見の検討

—過去のグループ間地位、現在の社会的支配志向性との関連—[1)]

水野　君平（北海道大学大学院 教育学院）

友だちグループの間の地位格差を表す「スクールカースト」という言葉はネットや書籍だけでなく、テレビドラマなどの広範囲のメディアで取り上げられている。しかし、スクールカーストに関する研究知見が少ないのが現状である。本研究では、青年の間でスクールカーストという言葉がどれだけ認知されているのか、スクールカーストに対してどのような印象を抱くのか、スクールカーストの中での高地位・低地位グループに対しての偏見は存在するのかを検討した。分析の結果、スクールカーストという言葉自体は青年の 8 割以上が認知しており、全体的な傾向としてスクールカーストに対してネガティブ寄りの印象、高地位・低地位グループにはポジティブ寄りの印象を抱いていた。さらに、社会的支配志向性のうちの平等主義志向性が高い者ほどスクールカーストをネガティブに捉えていた。同時に、社会的支配志向性のうちの集団支配志向性が高い者や中学校の頃に高地位グループだった者ほど低地位グループに対して相対的にネガティブに捉えていた。以上の結果から、青年の間でのスクールカーストや高地位・低地位グループに対する捉えられ方が示唆された。

キーワード：スクールカースト、仲間関係、仲間内の地位、回顧的調査法、社会的支配志向性

問題と目的

スクールカーストとは

学校における友人関係では、「友だちグループ」(以下、「グループ」とする)と呼ばれるようなインフォーマルな少数団が形成されることが知られている。特に、思春期では同性で、凝集性の高いグループが形成される(e.g., 石田・小島, 2009)。そして、グループ間の関係において、しばしば階層関係が形成されることが指摘されている(水野・太田, 2017; 鈴木, 2012)。例えば、貴島・中村・笹山(2017)の調査では、約8割の青年が、中高生の頃にグループ間に優劣関係があったことが明らかとなっている。このような階層的なグループ間の関係はスクールカーストと呼ばれているが、スクールカーストに関する心理学的な知見は未だに少なく、その内実が十分明らかではないことが指摘されている(高坂, 2017)。なお、本研究でもグループ間の地位格差を「スクールカースト」と定義して議論を進めていく。

スクールカーストと偏見

現在のスクールカーストに関する研究では、高地位グループの生徒ほど、学校適応が高いことが明らかにされている(鈴木, 2012)。またそれだけではなく、大学生に対する回顧的インタビューからは、高地位グループの生徒ほど、低地位グループの生徒に対して卑下的な態度をとることが明らかにされており(鈴木, 2012)、中学生に対する調査からは、グループ間の地位と学校適応感の関連には社会的支配志向性(SDO; Sidanius, & Pratto, 1999)のうちの集団支配志向性(i.e., SDO-D)を媒介することが明らかとなっている(水野・太田, 2017)。集団支配志向性はSDOの中でも集団間の支配・階層関係を直接的に是認する価値観であり(Ho et al., 2012)、SDO は偏見を予測するものである(e.g., Bratt, Sidanius, & Sheehy-Skeffington, 2016)。しかし、水野・太田(2017)では、SDO が低地位グループなどの他グループに対する偏見を予測するかまでは具体的に検討されていない。そこで本研究では、SDOやグループ間の地位が低地位グループに対する偏見に結びつくかを検討することとした。なお、本研究では倫理的制約により青年を対象に回顧的方法を用い低地位グループに対する偏見に結びつくかを検討する。

スクールカーストの広がりと認知度

偏見を予測すると思われるグループ間の地位格差は大学生の大多数が中高時代にあったことを認めている(貴島他, 2017)。しかし、スクールカーストという言葉自体を自身が生徒の頃もしくは、現時点で認知しているのかまでは明らかではない。スクールカーストという言葉は、森口(2007)の新書や森(2007)の週刊誌AERA の記事によって紹介され、その後は中央公論新社新書大賞に入賞した鈴木(2012)や2013年放映されたテレビドラマ「35 歳の高校生」、堀(2015)で取り上げられて大きく世間に広まったと思われる。そこで、本研究ではまずは青年の間でスクールカーストがどの程度認知されているのかを検討する。

スクールカーストに抱かれるイメージ

またスクールカーストという言葉自体が、生徒にとってどのようなイメージを持たれているのかについても実証的な知見がない。しかし、多くの先行研究(e.g., 森口, 2007; 鈴木, 2012)では、スクールカーストはネガティブな現象であることが暗黙の前提として議論が展開されてしまっている。また、鈴木(2012)の大学生へのインタビューでは低地位グループの生徒だった大学

生はスクールカーストに対してネガティブに振り返っている一方で、高地位グループだった大学生はポジティブに捉えると同時にネガティブにも捉えて学校生活を振り返っている。しかし、インタビューのダイアログにはスクールカーストという言葉が確認できず、低地位・高地位グループの生徒がスクールカーストをどう捉えているかも十分には明らかではない。そこで本研究ではスクールカーストはポジティブもしくはネガティブに捉えられているのか、またグループの地位や SDO によってそのイメージが変化するのかも検討する。

本研究の目的

本研究の目的を整理すると以下の 3 つである。第 1 にスクールカーストという言葉がどれだけ青年の間で認知されているのかを検討する。第 2 に、青年がスクールカーストをどのように捉えているのか、グループの地位やSDOによってどのように変化するのかを明らかにする。第3に、青年におけるスクールカーストの中の低地位グループに対する偏見をグループの地位やSDOの視点から検討する。

方法

調査協力者と手続き

北海道の専門学生・大学生 347 名(女性 = 151 名, M_{age} = 19.855, *SD* = 2.857, *Range* = 18—61)であった。専門学校・大学の授業時間を活用して質問紙を配布した後に講義時間内に回収した。回答に要した時間は 5—15 分であった。なお、本研究は調査協力者が中学生であったころとスクールカーストがメディアに登場した時期を合わせるために、26 歳以上の調査協力者の回答を除外した。

質問項目と質問紙の構成

質問紙の構成 質問紙は表紙を含め A4 用紙に片面印刷したものの 4 枚つづりであり、無闇にページを捲らないように教示した。

デモグラフィック項目 年齢と性別の回答を求めた。

感情温度 偏見の指標として先行研究(藤崎, 2013; 貴島他, 2017; 鈴木, 2012)をもとに高地位グループの生徒の特徴 4 項目(「面白いことが言える人」、「リーダーシップがある人」、「ファッションに気をつかっている人」、「自己主張が強い人」)と低地位グループの特徴 4 項目(「人と話すときに少しおどおどする人」、「地味な人」、「読書が好きな人」、「学校の行事に対して興味が無さそうな人」)の記述を作成し、それらの人物像に対し、0℃(冷たい、好ましくない)—100℃(温かい、好ましい)で感情温度を測定した。温度計を模したイラストに温度が指し示す大まかな位置を書き入れ、横にその温度を記入してもらった。

SDO 杉浦・坂田・清水(2014)の改訂版・社会的支配志向性尺度 22 項目(強く反対する—強く賛成するの 7 件法)を測定した。下位尺度 [2]は集団支配志向性(ω = 870, *M* = 4.273, *SD* = 0.916)と平等主義志向性(ω = .855, *M* = 5.182, *SD* = 0.925)であった。

グループ間地位格差の有無 中学生のころを想起してもらい、グループ間に上下関係があったかを尋ねた。回答方法は貴島他(2017)に倣い、「あった」、「あったかもしれない」、「なかった」で回答を求めた。分析する際に「あった」と「あったかもしれない」の回答を合計した。

グループ間地位格差に対する否定的態度 「中学生のころの、クラス内でのグループ間の上下関係について質問します」と教示し、2 項目(「グループ間の上下関係があるのは良くないことだと思う」、「グループ間の上下関係が存在しなければ楽だと思う」)の回答を 5 件法(そう思わない—そう思う)で尋ねた(r = .410)。

グループ間とグループ内の地位 自分が 1 番関わりのあったグループについて水野・太田(2017)を参考に 5 件法(そう思わない—そう思う)で尋ねた。まず、グループ間の地位を 2 項目(「私の所属していたグループはクラスの中心的な存在だった」、「私の所属していたグループはクラスで人気だった」)で尋ねた(r = .888, *M* = 2.635, *SD* = 1.300)。また、グループ内の地位も 2 項目(「私は自分のグループの中では中心的な存在だった」、「私は自分のグループの中では人気だった」)で尋ねた(r = .820, *M* = 2.810, *SD* = 1.148)。なお、グループがなかった場合は「グループに所属していなかった」と回答できるようにした。グループに所属していなかった者、グループ間地位格差の質問に「ない」と回答した者の回答は欠損値として処理した。

スクールカーストの認知とスクールカーストへの嫌悪感 中学生の頃と現在において、スクールカーストを知っているかどうかを「はい」「いいえ」で回答を求めた。次に、スクールカーストの定義を「グループ間の上下関係」と教示した上で、栗田(2015)の形容詞対 7 項目(良い—悪い、つめたい—あたたかい、感じの悪い—感じの良い、明るい—暗い、好ましくない—好ましい、嫌い—好き、親しみやすい—親しみにくい)を用い SD 法によってスクールカーストへの嫌悪を 7 件法で回答を求めた(ω = .879)。これらの質問項目は質問紙の最終頁に配置した。

結果

尺度構成と記述統計

感情温度 感情温度は2因子構造を想定して項目を作成したこと、固有値は 2.361、1.568、1.035 と推移し

たことから、2 因子構造を仮定して探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)をおこなった。因子負荷量が.3 以下、ダブルローディングした 2 項目[3] を削除し、再び因子分析をおこない、想定されたとおりの纏まりを示し、2 因子解が得られたと解釈した(Table 1)。それぞれの因子について平均値を求め、変数化した。

Table 1 感情温度の因子分析結果

	F1	F2
F1: 低地位グループの特徴(ω=.715)		
人と話すときに少しおどおどする人	**.776**	-.115
地味な人	**.716**	.021
読書が好きな人	**.450**	.266
F2: 高地位グループの特徴(ω=.627)		
面白いことが言える人	-.151	**.729**
リーダーシップがある人	.106	**.612**
ファッションに気をつかっている人	.068	**.417**
因子間相関	.347	

記述統計量と中点との差 2 種類の感情温度、グループ間地位格差に対する否定的態度、スクールカーストへの嫌悪感の平均、標準偏差ならびに理論的中点との差の検定結果を Table 2 に示した。その結果、すべての変数は理論的中点よりも有意に高かった。なお、グループ間地位格差に対する否定的態度とスクールカーストへの嫌悪感は高い正の相関を示した(r = .513, p < .001)。つまり、全体的な傾向として、低地位・高地位グループの特徴に対してポジティブに、グループ間地位格差とスクールカーストに対してはネガティブに捉えていることがわかった。

グループ間地位格差・スクールカーストの認知率

それぞれの認知率 中学生のころにグループ間に上下関係が「ある」、「あったかもしれない」と回答した人の割合は合計して 82.895%であり有意な回答の偏りであった(χ^2(1, N= 304) = 131.579, p < .001)。次に、中学生の時点でスクールカーストを知っていたと回答した人の割合は 47.006%であり、有意な回答の偏りではなかったが(χ^2(1, N = 334) = 1.198, *n.s.*)、現在の時点でスクールカーストを知っている割合は 85.030%であり、有意な回答の偏りであった(χ^2(1, N = 334) = 163.940, p < .001)。つまり、8 割以上の青年は中学校生活の中でグループ間地位格差があり、現在ではスクールカーストという言葉も認知していることがわかった。

グループ間・内の地位との関連性 次に、中学生の頃のグループ間・グループ内の地位と「スクールカースト」の認知(中学生の時点と現時点)との関連を検討した。その結果、有意な相関はみられなかった(rs < .048, *n.s.*)。つまり、スクールカーストの認知度は中学生時代にどのような地位のグループに属していたか、グループの中でどのような地位にいたかは関係ないということがわかった。

スクールカーストへの嫌悪感、グループ間地位格差に対する否定的態度、感情温度との関連[4]

中学生の頃のグループ間の地位とグループ内の地位、SDO がスクールカーストへの嫌悪感、グループ間地位格差に対する否定的態度、2 種類の感情温度のそれぞれとどう関連するかを検討するために、重回帰分析をおこなった(Table 3)。その結果、スクールカーストへの嫌悪感に対しては平等主義志向性が有意な正の関連を示し(β= 238, p < .001) 、グループ間地位格差に対する否定的態度に対しては集団支配志向性、平等主義志向性が有意な関連を示した(順に β = −.127, p < .05; β = .409, p < .001)。つまり、集団間の平等を支持する者ほどグループ間地位格差とスクールカーストに対しネガティブに捉え、集団間の階層関係を支持する者ほどグループ間地位格差をポジティブに捉えていることがわかった。

そして、低地位グループの特徴への感情温度に対してはグループ間の地位が有意な負の関連を示し(β= −.158, p < .05)、高地位グループの特徴への感情温度に対しては集団支配志向性、平等主義志向性が有意な正の関連を示した(順に β = .150, p < .05; β = .165, p < .05)。つまり、中学生の頃に高地位グループにいた者ほど低地位グループの特徴に対してネガティブであり、集団間の平等を支持する者・集団間の階層関係を支持する者ほど高地位グループの特徴に対してポジティブであったことがわかった。

さらに、詳細に低地位グループに対する印象を検討するため、低地位グループの特徴への感情温度から高地位グループの特徴への感情温度の点数を差し引いた差得点の変数を作成した。この変数の得点が高い者ほど相対的に低地位グループに対してポジティブなイメージをもつことを意味する。Table 3 と同様の独立変数、差得点の変数を従属変数とした重回帰分析を行った結果、グループ間地位が有意な負の関連を示し(b = −1.713, SE = .751, β = −.158, p < .05)、集団支配志向性も有意傾向の負の関連を示した(b = −1.903, SE = 1.090, β = −.119, p < .10)。つまり、中学生の頃に高地位グループにいた者や集団間の階層関係を支持する者ほど相対的に低地位グループの特徴に対してネガティブであることがわかった。

Table 2　感情温度、グループ間地位格差に対する否定的態度、スクールカーストへの嫌悪感の基礎統計量と中点との差

	平均	標準偏差	理論的中点	差の検定
スクールカーストへの嫌悪感	5.422	0.944	4.0	$p<.001$
グループ間地位格差に対する否定的態度	3.752	0.949	3.0	$p<.001$
感情温度(低地位グループの特徴)	54.909	12.721	50.0	$p<.001$
感情温度(高地位グループの特徴)	66.618	12.491	50.0	$p<.001$

Table 3　スクールカーストへの嫌悪感、グループ間地位格差に対する否定的態度、感情温度を従属変数とした重回帰分析の結果

	嫌悪感			否定的態度			感情温度(高地位)			感情温度(低地位)		
	b	*SE*	*β*	*b*	*SE*	*β*	*b*	*SE*	*β*	*b*	*SE*	*β*
グループ間の地位	-.066	.049	-.090	-.002	.045	-.003	-.087	.633	-.009	-1.567	.684	-.158*
グループ内の地位	.029	.057	.035	.021	.052	.026	-.713	.730	-.068	-.356	.783	-.032
平等主義志向性	.249	.069	.238**	.430	.064	.409***	2.214	.904	.165*	1.362	.983	.093
集団支配志向性	-.033	.070	-.031	-.135	.065	-.127*	2.040	.923	.150*	.049	.994	.003
N	232			236			231			231		
R^2	.072**			.206***			.041*			.041*		

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

注）*b*= 非標準化偏回帰係数，*SE*= 標準誤差(*b*)，*β*= 標準化偏回帰係数

考察

結果のまとめ

本研究の目的はスクールカーストという言葉がどの程度、青年の間で認知されているか、青年がスクールカーストをどのように捉え、それがグループの地位やSDO によってどのように変化するか、青年におけるスクールカーストでの低地位グループへの偏見をグループの地位やSDOの視点から検討することだった。

調査の結果、スクールカーストという言葉は8割以上の青年が認知していた。また、中学生の時点でスクールカーストという言葉の認知は半数以下であったが、グループ間の地位格差については8割以上の青年が「あった(かもしれない)」と回答していた。そして、青年は全体的にはスクールカーストをネガティブに捉えており、特に現時点でスクールカーストを認知している者ほどよりネガティブに捉えていた。最後に、中学生の頃の高地位グループにいた者ほど低地位グループの特徴をもつ人物に対してネガティブに捉え、集団支配志向性をもつ者ほど相対的に低地位グループの特徴をもつ人物に対してネガティブに捉えていた。

スクールカーストの認知率およびグループ間の地位格差の認知

中学生の時点ではスクールカーストという言葉は半数しか認知していなかったが、グループ間に地位格差があった、もしくはあったかもしれないと大多数の者が答えており、さらに現時点は大多数がスクールカーストという言葉を認知していた。つまり、調査協力者が中学生の頃には推定で3―6年前であり、スクールカーストという言葉は書籍で記されはじめたため、約半数が認知していたことになる。また、スクールカーストという言葉を知らずともグループ間に地位格差があるということは十分に認識していた。この点は貴島他(2017)を支持する結果となった。そして、現在ではスクールカーストという言葉はテレビやネットでも散見されるようになったため、大多数の者が認知していたと考えられる。これらの結果から、スクールカーストという言葉は少なくとも青年の中では十分認知されている言葉だということが明らかとなった。

また、中学生の頃のグループ間・内の地位とそれぞれの時点での認知は有意な関連を示さなかった。すなわち過去、自身がスクールカーストの中の地位に関わらず、スクールカーストは多くの青年にとって認知されている言葉だったということだろう。このことから、スクールカーストに関する実証的知見が少ない現状では、スクールカーストにおける学校でのさまざまな問題は実証的知見ではなく、個人の経験もしくはベテラン教師や評論家の経験的指摘に基づく理解がなされ、語られる可能性が高いと考えられる。そのため、スクールカーストをより正確に理解し、教育上の問題に対処していくためにも実証的知見の蓄積が望まれるだろう。

スクールカーストに対する捉え方

スクールカーストという言葉やグループ間地位格差はネガティブ寄りに捉えられていた。さらに、中学校時

代自身のグループの地位とスクールカーストやグループ間の地位格差に対する捉え方は関連しなかった。鈴木(2012)の大学生に対するインタビューでも、高地位グループの生徒はスクールカーストをポジティブなものとして捉えている一方で、リーダーシップやユーモアの発揮に対してプレッシャーを感じており、ネガティブなものとしても捉えている。このような要因から、大半の者はグループ間の地位に関係なくスクールカーストをややネガティブに捉えられていたのだろうと考えられる。

また、スクールカーストへの嫌悪感とグループ間地位格差に対する否定的態度はそれぞれ平等主義志向性と正の関連を示し、グループ間地位格差に対する否定的態度のみ集団支配志向性と負の関連を示した。これは、スクールカーストという言葉やグループ間地位格差は、グループ間の不平等な関係性であるからだろう。スクールカーストへの嫌悪感とグループ間地位格差に対する否定的態度は高い相関を示したが、スクールカーストへの嫌悪感ではなくグループ間地位格差に対する否定的態度が集団支配志向性と関連した可能性の 1 つとして、以下のことが考えられる。それは、測定項目で形容詞によるポジティブ・ネガティブの抽象的なイメージではなく、「ない方がいい」や「存在しなければ楽」という具体的なグループ間地位格差に対する否定的態度(価値観)を測定していたことが起因しているのかもしれない。これらの結果と水野・太田(2017)の結果を合わせると、中学生だけでなく、青年でもSDO(特に集団支配志向性)が高い者ほどスクールカーストのような学級内の集団間階層構造を支持することが明らかとなった。すなわち、スクールカーストとSDO の関連性はより広い年齢層で支持されることであり、教師もSDOが高いとスクールカーストを支持することが示唆され、スクールカーストを低減させるには教師の SDO が重要になる可能性も考えられる。

高地位・低地位グループの特徴に対する評価

先行研究で記述された高地位・低地位グループの特徴を収集し、偏見の指標としてこれらに対する印象を感情温度によって測定した。全体的な傾向として、高地位・低地位グループの特徴とも肯定的に捉えられており、因子間相関は中程度の相関もみられた。このことは、青年にとって活発でユーモアがある高地位グループの特徴だけでなく、消極的で大人しい低地位グループの特徴も肯定的に捉えられるということを表し、どのような人物に対しても全体的にポジティブな印象を抱いた結果だろう。

そして、中学生の頃にグループの地位が高かった者は低地位グループの特徴に対してネガティブに評価した。鈴木(2012)のインタビューからも、中学生の高地位グループの生徒は低地位グループの生徒に対して卑下的な態度を取ることが明らかとなっている。つまり、本研究の知見から、スクールカーストにおいて高地位グループの生徒はスクールカーストの中だけではなく、その後も低地位グループの生徒の特徴をもつ人物に対してよりネガティブな印象を抱く可能性を示唆している。

次に、SDO のうち集団支配志向性が高い者ほど高地位の特徴に対してより肯定的に捉えていた。高地位の特徴の項目は学校中で高地位グループの人物の特徴から作成されたので、集団間の格差を肯定的に捉える者ほど、高地位グループの人物に対してより肯定的だったと考えられる。また、平等主義志向性は高地位に対する感情温度と正の関連を示した。感情温度の項目がリーダーシップなど高地位グループの肯定的な側面も測定していたため、このような結果が得られた可能性も考えられる。

相対的な低地位グループの特徴に対する感情温度に対しては、グループ間の地位が負の関連を示しただけでなく、集団支配志向性も有意傾向だが負の関連を示した。鈴木(2012)のインタビューのほかにも、高地位グループの中学生ほど集団間格差を直接的に肯定する集団支配指向性が高いことが明らかにされた(水野・太田, 2017)。SDO は偏見などのネガティブな態度を予測することから、これらの知見と本研究の結果を合わせると、スクールカーストという学校内の地位格差の環境においては、高地位グループの成員がもつ低地位グループに対する偏見が示唆されたと考えられる。これらの結果からも、スクールカーストにおける偏見を示唆できたのではないかと思われる。

しかし、本研究で作成した 2 種類の感情温度は全体的に得点が高く、因子間相関は正の相関を示した。このことから、どのような人物であっても全体的にポジティブな印象を持たれている傾向にあること、さらに評定者間でポジティブ・ネガティブのどちらかに評定するかが偏ること、十分に高地位と低地位の特徴を弁別し反映しきれなかった可能性が考えられる。今後は、感情温度の項目の精緻やほかの手法を用いて偏見を測定することが求められるだろう。例えば、顕在的測定なら非人間化(dehumanization)が考えられ、潜在的方法なら試筆版の潜在連合テスト(IAT)や FUMIE テスト(Mori, Uchida, & Imada, 2008)が考えられる。

本研究のまとめと展望

本研究によって、青年はスクールカーストを広く認知していることが明らかとなった。また、中学生の頃のグループや集団間の格差関係に対する態度に関わらず

スクールカーストを否定的に捉える一方で、中学生の頃に高地位グループにいた青年や集団間の格差関係に対して肯定的な態度をもつ青年は低地位グループに属するような人物に対して否定的な印象をもつことも明らかとなった。すなわち一部の青年は、スクールカーストという階層構造自体を否定的に捉えておきながら、その一方で、その中で低地位になり得る人物に対しても否定的になるというダブルスタンダードな態度をもつことが示唆された。

最後に本研究の限界点と展望を述べる。まず、本研究は青年を対象とした回顧的調査であるということである。そのため、本研究の知見をどこまで中学生のスクールカーストの問題へと一般化できるかは難しい。学校で中学生に本研究と同様の項目を尋ねることは倫理的に難しいかもしれないが、オンライン調査モニタを用いるなどの方法(Iimura, & Taku, 2018; 森永・坂田・古川・福留, 2017)によって中学生を対象にスクールカーストの認知や高地位・低地位グループに対しての印象・偏見を検討することが必要だろう。また、本研究における高地位・低地位グループの特徴は先行研究の尺度やインタビューのデータから想定したものであり、現在の中学生の間での高地位・低地位グループの特徴とどれだけ一致するかは不明確である。そのため、この点も中学生を対象にした調査から明らかにする必要があるだろう。

引用文献

Bratt, C., Sidanius, J., & Sheehy-Skeffington, J. (2016). Shaping the Development of Prejudice: Latent Growth Modeling of the Influence of Social Dominance Orientation on Outgroup Affect in Youth. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *42*, 1617-1634. doi: 10.1177/0146167216666267

藤崎 雅子 (2013). 男子はリーダーシップ、女子は気の強さがスクールカーストを決定 Retrieved from http://shingakunet.com/journal/trend/3698/ (2017 年 9 月 7 日)

Ho, A. K., Sidanius, J., Pratto, F., Levin, S., Tomsen, L., Kteily, N., & Sheehy-Skeffington, J. (2012). Social dominance orientation revisiting the structure and function of a variable predicting social and political attitudes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *38*, 583-606. doi: 10.1177/0146167211432765

堀 裕嗣 (2015). スクールカーストの正体――キレイゴト抜きのいじめ対応―― 小学館

Iimura, S. & Taku, K. (2018). Positive developmental changes after transition to high school: Is retrospective growth correlated with measured changes in current status of personal growth? *Journal of Youth and Adolescence.* Advance online publication. doi: 10.1007/s10964-018-0816-7

石田 靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連――仲間集団の形成・所属動機という視点から―― 愛知教育大学研究報告, *58*, 107-113.

貴島 侑哉・中村 俊哉・笹山 郁生 (2017). スクールカースト特性尺度の作成と学級内地位との関連の検討 福岡教育大学紀要, *66*, 27-37.

高坂 康雅 (2017). 青年期の友人関係 高坂 康雅・池田 幸恭・三好 昭子 (編) レクチャー青年心理学――学んでほしい・教えてほしい青年心理学の 15 のテーマ―― (pp. 95-111) 風間書房

栗田 季佳 (2015). 見えない偏見の科学――心に潜む障害者への偏見を可視化する―― 京都大学出版会

水野 君平・太田 正義 (2017). 中学生のスクールカーストと学校適応の関連 教育心理学研究, *65*, 501-511. doi: 10.5926/jjep.65.501

森 慶一 (2007). 子ども「学校カースト制」いじめ最底辺はキモメン *AERA*, *20*, 62-64.

Mori, K., Uchida, A., & Imada, R. (2008). A paper-format group performance test for measuring the implicit association of target concepts. *Behavior Research Methods*, *40*, 546-555. doi: 10.3758/BRM.40.2.546

森口 朗 (2007). いじめの構造 講談社

森永 康子・坂田 桐子・古川 善也・福留 広大 (2017). 女子中高生の数学に対する意欲とステレオタイプ 教育心理学研究, *65*, 375-387. doi: 10.5926/jjep.65.375

Sidanius, J., & Pratto, F. (1999). *Social dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression.* New York: Cambridge University Press.

杉浦 仁美・坂田 桐子・清水 裕士 (2014). 集団と個人の地位が社会的支配志向性に及ぼす影響 社会心理学研究, *30*, 75-85. doi: 10.14966/jssp.30.2_75

鈴木 翔 (2012). 教室内カースト 光文社

註

1) 本研究にあたり、加藤弘通先生(北海道大学)にご指導を賜りました。記して感謝いたします。また調査にご協力いただいた皆様、ご指摘を賜りました査読者の先生に御礼申し上げます。なお、本研究の一部は日本社会心理学会第 58 回大会で発表されました。

2) 杉浦他(2014)の集団支配志向性は Ho et al (2012) の SDO-D に相当し、平等主義志向性は SDO-E の得点を逆転させたものに相当する。

3) 「学校の行事に対して興味が無さそうな人」、「自己主張が強い人」を除外した。

4) 重回帰分析では、グループ間地位格差の有無の質問に「なかった」と回答した者のデータも除外した。

Visibility and Image of “School caste" and Prejudice toward High/Low-Status Peer Group among Youth:

Inter-peer group status and Social Dominance Orientation

Kumpei MIZUNO (*Graduate School of Education, Hokkaido University*)

“School caste”, defined as the hierarchy among peer groups has been widely used in many social media platforms such as TV, internet or book. However, there are few empirical studies about school caste. This study examined the followings, (1) how many youths recognize the presence of school caste, (2) what are their impression of school caste, and (3) whether they feel prejudice toward high/low-status peer group within school caste. The result showed over 80% of the youths recognized the presence of school caste and most of them perceived school caste negatively but viewed high/low-status peer group positively. Moreover, SDO-E (i.e., social dominance orientation-Egalitarianism, a sub-dimension of social dominance orientation) negatively correlated with impression of school caste. In addition, having higher SDO-D (i.e., social dominance orientation-Dominance, the other sub-dimension of SDO) and also those who used to belong to the high-status peer group in middle school had a negative feeling toward the low-status peer group. The present result suggested that how the youths perceive school caste and high/low-status peer group.

Keywords: school caste, peer status, peer relationships, retrospective research, social dominance orientation.